

学部・研究科名生命科学研究科

学部長・研究科委員長名坂田 洋一

学科名・専攻名バイオサイエンス専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ ☐ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	特論、特別演習、特別実験、特別研究指導などの必修科目のほか、分野横断的な選択科目（生命情報工学、分子細胞生物学など）および論文英語、プレゼンテーション法など、大学院博士前期・後期課程にふさわしい授業を実施している。特に分野横断型選択科目については、積極的に学外の第一線の講師を呼んで、講義を行っている。	教員、学生間また学生同士の交流を活性化するため、ポスター形式による専攻全体での中間発表会や発表会後の研究談話会などを行っている。	学生の授業にのぞむ姿勢、実験や研究に対する活動の評価、中間報告会、修論・博論発表会等により評価している。	主査および副査を置くことにより指導教員以外の教員が、研究の進捗状況や授業の習熟度を把握するほか、専攻全体の発表会における質疑応答などに基づき評価している。	授業評価等に基づき、全所属教員により定期的に点検・評価し、その結果について専攻会議で慎重に議論し、教育課程の内容と方法を決定している。またシラバスなども授業担当教員以外の教員（第三者）が評価している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・先端研究の知識、技術を身につけられる。	【長所】 学生自身の自主性を尊重している。	【長所】 特になし	【長所】 グループディスカッションと個別ディスカッションを通じてきめ細かな指導を行っている。	【長所】 特になし
	【特色】 ・外部講師等から学外の情報も積極的に取り入れられる。	【特色】 学部からの内部進学生が多く学生間の交流が活発である。	【特色】 特になし	【特色】 特になし	【特色】 特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし
根拠資料名	大学院カリキュラム、大学院学生便覧、大学院シラバス、学外講師一覧、授業実施記録、専攻3ポリシー	専攻全体の修士論文・博士論文発表会実施記録	専攻全体の修士論文・博士論文発表会実施記録、修士論文・博士論文中間発表会実施記録	専攻全体の修士論文・博士論文発表会実施記録、修士論文・博士論文中間発表会実施記録、専攻3ポリシー	学科会議議事録

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	アドミッショポリシーに基づき、生命科学に強い関心を持ち、食糧、環境、健康問題の解決にチャレンジできる学生を求めている。大学院進学後に必要な学力を評価するために分子生物学、英語を試験科目として科しており、これらの筆記試験に加え、複数の教員による口頭試問を実施している。全ての科目の試験後に受験生名をブラインドにした上で、試験の得点を基に専攻長を中心とした専攻教員全員による入試判定委員会により公正かつ客観的に選抜している。	主査および副査を中心に、学生の単位習得や研究の進捗に問題がないかを確認し、必要に応じて改善策を講じているほか、中間発表会などにより専攻全体で適切性について点検・評価している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・内部進学か外部進学かによらず、受験生とは選抜試験前からコンタクトを取り、進学後や卒業後の進路についてディスカッションを行っている。	【長所】 ・一人の学生の教育に複数教員が関与するため公正に点検・評価できる。
	【特色】 ・口頭試問では専門知識だけでなく研究に取り組む姿勢や熱意なども確認できる。英語はTOEICスコアを導入しており、在学中の最も高いスコアを提出することができるため、英語の学習意欲向上にもつながっている。	【特色】 ・特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・TOEIC 以外の外部試験に関しても導入を検討する余地が残されている。	【課題】 ・特になし
根拠資料名	大学院入試募集要項、専攻3ポリシー	修士論文・博士論文中間発表会実施記録

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	設置の趣旨に基づき、学科の専任教員を配置している。専任教員の採用は、原則として公募し、募集要項にて専門分野に関する能力、教育に対する姿勢などの資質を明記している。 また、大学の理念・目的、研究科の教員組織の編成に基づき、専攻の教員組織の編成方針を作成し、本学のホームページ上で公開している。	指導教授として文部科学省の設置基準を上回る教授 10 名を配置しており、十分な教育と研究指導を行うことができる。	令和 6 年度は新規の募集・採用は行われなかったが、昇格申請があった。専攻の教授により構成される人事委員会により、職階ごとに「東京農業大学における教員採用・昇格に関する条件」を定め、「研究業績得点化表」・「教育・管理業務・社会活動評価得点化表」に基づき、審査を実施した。	自己教育評価、授業評価により、授業、研究指導、国際交流、大学運営、課外活動、学外活動を評価している。全学的な FD 委員会にも参加をしている。また、教員全員が原則として科学研究費補助金をはじめとする外部研究資金に申請することになっている。	学部改組に伴い、本専攻の教員組織に関しても教員体制を変更した。動物、植物、細胞分子機能の 3 分野の体制は維持し、それぞれの分野を専門とする教員を配置した。さらに留学生へのきめ細やかな対応や英語での授業に対応するため、依命留学制度を活用し若手教員の海外留学を推進している。令和 6 年度は教員 1 名が依命留学した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・生命科学の幅広い分野を網羅できる教員の配置している。	【長所】 ・動物、植物、細胞分子機能の 3 分野にバランス良く教員を配置している。	【長所】 ・人事委員会による教員体制の定期的に確認している。	【長所】 ・競争的研究資金の獲得を推進しており、採択されている教員の比率が高い。	【長所】 ・3 分野に各 2 研究室というバランス良い教員体制をとっている。
	【特色】 ・生命科学の幅広い分野を網羅できる教員の配置している。	【特色】 ・適切な年齢、職位バランスを考慮した採用、昇任を行っている。	【特色】 ・各活動の点数化による明確な昇格目標を提示している。	【特色】 ・競争的研究資金への申請を積極的に行っている。	【特色】 ・複数の女性教員が配置され、ロールモデルにもなっている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし
根拠資料名	大学院 HP、大学院学生便覧	大学院学生便覧、学科（専攻）教員配置表	教務職員資格審査基準及び関連書類	自己教育評価 授業評価 科学研究費助成事業データベース	大学案内

学部・研究科名生命科学研究科

学部長・研究科委員長名坂田 洋一

学科名・専攻名分子生命化学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	文部科学省に対する設置申請に基づいた教育課程を編成しており、特論科目、特別実験、特別演習の他、分野横断型科目や英語論文購読、プレゼンテーション法など、博士前期課程に相応しいカリキュラムを編成している。点検の結果、現行のカリキュラムの効果的であると認めた。質の高い博士人材を輩出する。	自主的な研究活動を推奨するとともに、特別演習や英語論文購読、研究報告会での学生同士、学生と教員間の活発な議論を通じて交流を活性化している。修士、博士2年生による中間発表会、修士論文発表会もおおむね順調に実施でき、専攻全体の活性化と研究意欲の増進につながった。	各分野に対する理解度や演習での積極性などに加え、日常的な研究姿勢や研究報告も踏まえて、総合的に評価している。学位授与方針に従った学位授与を予定している。	伝統的な化学の視点を保持しながらも、時代の変化に囚われない普遍的な価値を持ち、確かな自然科学系の基礎知識・技術を身につけた人材の養成のため、習熟度や研究姿勢などから総合的に評価している。	博士前期課程および新設の博士後期課程について総合的な点検を行ったが、現時点で問題ないことを確認している。来年度完成年度を迎える博士後期課程においては、これまでの状況を分析し、改善、向上に向けた見直しを行う。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・幅広い知識を習得出来る	【長所】 ・学生の自主性	【長所】 ・なし	【長所】 ・議論を通じた総合的な指導と評価	【長所】 ・なし
	【特色】 ・最先端の研究を実施出来る	【特色】 ・教員と学生の活発な交流	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・博士後期課程学生の適切な修了。	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	講義要項	研究報告会資料	専攻3ポリシー	研究報告会資料、専攻3ポリシー	博士後期課程設置申請資料

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	受け入れ方針に基づき、化学を中心とする伝統的科学に興味と学習意欲を持ち、農学・生命科学領域における問題の解決を目指す学生を求めている。大学院進学後に必要な学力と意欲を評価するために、専門科目（5科目から2科目を選択）と英語の資格試験とともに、複数教員による口述試験を課している。試験問題は専攻教員からなる入試委員会で相互確認し、出題の適正や難易度を判断している。博士前期課程の推薦入試については募集要件を見直した。試験結果については指導教員全員で可否を審議し、客観的で公正な選抜を実施している。	年2回の大学院一般入試の前後に、求める学生像や受け入れ人数、試験問題の出題方針などを専攻内で議論している。受け入れた大学院生については複数教員で指導を行い、大学院生としての資質、学力、研究推進力などを備えていることを確認し、受け入れの適切性についても確認している。博士後期課程についても、継続的に受入れを実施している。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 ・専門科目が選択でき、広い学識とともに高い専門性も測ることが出来る。	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・指導教員だけでなく複数教員による客観的な指導と公正な評価
現状説明を踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	大学院募集要項、専攻3ポリシー	研究報告会資料、専攻3ポリシー

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	専攻設置の趣旨に基づき、農学・生命科学領域において化学的知識に基づいた展開可能な基礎力を駆使し様々な案件に対応可能な人材を養成可能な専任教員を配置する方針としている。教員の公募、採用時には本方針を明示している。	専任教員14名（教授7名、准教授3名、助教4名）を2分野（有機化学分野、分子機能解析学分野）にバランス良く配置し、十分な教育・研究指導が可能な体制を整えている。本年度は教員の昇格も検討した。	教員人事に関しては、学科内の専任教授よりなる人事委員会を組織し、大学の定める「教員採用・昇格に関する条件」に基づき判断している。次年度より1名の准教授を教授に昇格することを決定した。また次年度は助教1名を採用することにより教育体制の拡充を計った。	各種の研修を通じて教員としての資質向上をはかっている。また、自己教育評価や学生による授業評価を通じた評価体制が整っている。	教員の資質や年齢構成を総合的に判断しながら教員の配置を行っている。本年度は1名の准教授の教授昇格を決定し、継続的な教育・研究体制の維持を図っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・化学を基盤とした教育・研究体制の充実	【長所】 ・化学を基盤とした教育・研究体制の充実	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・化学を基盤とした幅広い生命科学分野の教員配置	【特色】 ・化学を基盤とした幅広い生命科学分野の教員配置	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・適正状態の維持に必要な人事	【課題】 ・適正状態の維持に必要な人事	【課題】 ・	【課題】 ・適正状態の維持に必要な人事
根拠資料名	設置の趣旨	学科ホームページ	人事申請資料	自己教育評価 授業評価	なし

学部・研究科名 生命科学研究科

学部長・研究科委員長名 坂田 洋一

学科名・専攻名 分子微生物学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	専攻の特性を反映した科目である特論科目、特別実験、特別演習に加えて、論文英語やプレゼンテーション法といった、研究を推進する上で必要な学位課程にふさわしい科目を体系的に編成している。	教員と大学院生の議論の場を研究室内および専攻内で設けると共に、論文紹介等を通じて研究の最新情報を得て大学院生の研究意欲を活性化させている。学会参加への積極性も入学時ガイダンスを通じて活性化を講じている。本年は学部2年生にも院の中間発表会を公開し、説明力のupも導入した。	授業内容の理解度や積極性、研究への取り組み姿勢に基づいて適切に成績評価および単位認定を行っている。ゼミで実施する英語論文ゼミ等の実施に対する取り組み姿勢も総合的に評価している。研究室への出席率も考慮し、成績に反映している。	研究室で実施するゼミや専攻内の発表会によって学習成果を把握し、評価している。博士後期学生を含めてTOEICの成績向上を促している。	研究室内および専攻内で定期的な教育内容の点検や評価をしている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・研究に必要な一連のスキルが習得できる。	【長所】 ・自主性や意欲の向上	【長所】 ・なし	【長所】 ・議論により、理解度を見極め、必要に応じて適切な指導ができる。	【長所】 ・複数教員での授業進行、内容および方法改善
	【特色】 ・先端的な研究ができる。	【特色】 ・活発なディスカッション	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	講義要項	発表会資料	専攻の3方針	専攻の3方針	

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	アドミッションポリシーに基づき、生命現象に強い関心をもち、分子微生物学分野に期待される最先端技術・知識を活用した様々な社会問題を解決できる人材を求めている。入学者選抜ではこれらに関連する学力を評価するため、微生物学、生物化学、分子生物学、英語を筆記試験科目としている。加えて、複数の教員による口述試験を実施している。これら試験結果をもとに専攻教員全員により入試判定委員会を開き、客観的で公正な合否の審議を実施している。	筆記試験と口述試験の結果を踏まえて十分に検討し学生を受け入れ、研究室および専攻で適切性について点検、評価している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・ 専攻の研究に関連する分野の学力を異分野間で評価できる点が挙げられる。	【長所】 ・ 主査・副査を分野間で相互に評価するシステムを採用することで、複数の教員によって多面的に点検、評価できる点が挙げられる。
	【特色】 ・ なし	【特色】 ・ なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名	専攻の 3 方針、大学院募集要項	専攻の 3 方針

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	専攻設置の趣旨に基づいて、生命科学分野における創造的、独創的な研究を推進できる人材を養成できる学科専任教員を配置している。ホームページ上や専任教員の公募の時に本方針を明示している。HPやパンフレットは適宜確認し、更新作業を行っている。	専任教員10名（教授6名、准教授4名）からなり、専攻の2分野（微生物機能分野、生物間相互作用分野）において十分な教育研究指導が行える。	教員募集や採用については専攻教授からなる人事委員会で基準を設けている。また、全教員の業績を確認し、昇格の規定を満たしているか、将来的にどのタイミングで昇格できるかを議論している。教員採用の際は、教育経験に加え、年齢幅も考慮している。	教員の資質向上のために研修を受講するとともに、自己評価点検や学生からの授業評価を改善の参考にするようにしている。	学科専任教授会を中心に、研究室毎の教育研究の内容確認および方向性の明確化を進め、分野および専攻の方針と一致しているか評価し、必要に応じて改善・向上に取り組んでいる。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・生命科学分野の教育研究環境の充実	【長所】 ・分野毎にバランスよく専任教員が配置されている。	【長所】 ・適切な募集・採用・昇任を進めている。	【長所】 ・なし	【長所】 ・教員個々の自由度を保ちつつ、必要な点検・改善を進めている。
	【特色】 ・微生物学分野を軸とした生命科学分野の教育研究環境の充実	【特色】 ・5つの研究室の教員の専門性や年齢構成のバランスが保たれている。	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	HP	HP	人事申請資料	自己教育評価 授業評価	研究業績、自己評価

学部・研究科名生命科学研究科

学部長・研究科委員長名坂田 洋一

学科名・専攻名バイオサイエンス専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	研究室という集団の中で、研究および実習などを通してコミュニケーション能力、リーダーシップ、協調性や対人関係の構築力を養うと共に、各個人の独自性および創造性を発掘する。	最先端の知識や技術を習得する中で、自ら情報を収集する能力および問題解決能力を養う。	自らの研究内容を自在に発信・討論できる能力を養成する。
実行サイクル	__ 2 __ 年サイクル（令和 6 年～令和 7 年）	__ 2 __ 年サイクル（令和 6 年～令和 7 年）	__ 2 __ 年サイクル（令和 6 年～令和 7 年）
実施スケジュール	特別実験Ⅰ～Ⅳにおいて研究室内での実験実習、担当教員とディスカッションを通じて教育指導を実施する。	分野ごとの特論Ⅰ・Ⅱ並びに専攻共通の特別演習Ⅰ～Ⅳにおいて基礎的な知識や最新の研究の動向を理解すると共に、学会、研究会に参加する。	研究室ごとに開講・実施されるプレゼンテーション法において、プレゼンテーションの基礎を学ぶ。また研究成果を国内外の学会などで発表する。
目標達成を測定する指標	研究室での活動率、および中間発表会、修士・博士論文発表会によって判断する。複数の教員で各大学院生の進捗を把握すると共に、適切な指導を行う。	中間発表会、修士・博士論文発表会で判断する。また、学会、研究会で得られた情報を教員と共有する。	中間発表会、修士・博士論文発表会によって判断する。また学会での発表も評価の指標とする。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	適切にスケジュールを実施することにより、目標を達成している。	自らの情報収集をもとに新たな課題の提案などもあり、また問題解決を行うためのコミュニケーション能力も十分に示された。	中間発表会、修士・博士論文発表会の他に積極的な学会発表（123 件）、参加を行った。さらにバイオサイエンス学科の学部 1 年生に向けて、あるいは大学主催の大学院生研究発表会では他専攻の学生・教員に向けてもプレゼンテーションを行い、様々な背景の人々に自身の研究を説明した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・研究（研究室活動）が主であるため、院生同士での繋がりが密である。	【長所】 ・異分野の教員との積極的なディスカッションができる。	【長所】 ・年 2 回程度の外部での発表を目指している。
	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし
根拠資料名	修士課程・博士課程中間発表会プログラム、修士・博士論文発表要旨集など	修士課程・博士課程中間発表会プログラム、修士・博士論文発表要旨集など	修士課程・博士課程中間発表会プログラム、修士・博士論文発表要旨集など

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	生命科学分野における先端研究を推進させる為に、国内外での研究動向や情報をいち早く収集する。	先端研究を推進し、得られた結果をさらに深化し発展させるためには、実験実習費以外の研究費や、学外の研究コミュニティが重要であることから、外部からの競争的研究資金を積極的に導入する。	国際学術雑誌への投稿だけでなく、一般向けの講義、講演会、ホームページならびに出版物を通じて研究成果を発信する。
実行サイクル	__ 2 __ 年サイクル（令和6年～令和7年）	__ 2 __ 年サイクル（令和6年～令和7年）	__ 2 __ 年サイクル（令和6年～令和7年）
実施 スケジュール	学会や研究会などに参加しこれらの情報収集に役立てる。また有益な情報は学科教員間で情報交換する。	原則として、教員全員が、科学研究費補助金（採択課題の継続申請を含む）をはじめとする競争的研究資金に申請する。	学内外で模擬講義、出張講義および講演会などを実施する。 Web 上での情報発信を行う。
目標達成を測定する指標	学会、研究会への参加状況を確認する。	外部資金申請者、獲得者を確認する。	国際学術雑誌掲載数、模擬講義および講演などの回数を確認する。ホームページのコンテンツ改訂を確認する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	適切なスケジュールで学会活動することにより、目標を達成している。国内において学会およびシンポジウムで 114 件の発表を行った。	概ね、全ての教員が科学研究費補助金等の競争的研究資金に応募しており継続申請も含め、合計 47 件の申請を行った。	各研究室のホームページは延べ 14 回の改訂を行った。オープンキャンパス（令和6年8月3日および4日）における模擬講義や出張講義を 13 件実施した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・特になし	【長所】 ・学科に所属する全ての研究室（研究分野）が申請できている。	【長所】 ・最新の研究成果をわかりやすく社会に向けて発信できている。
	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし
根拠資料名	自己点検システム、所属学会の会報	科学研究助成事業データベース、総研管轄資料	学科パンフレット、学科ホームページなど

3. その他に関する総合的事項

	①	②
目 標	本専攻での研究成果を海外に発信する。	生命科学分野の教育・研究を通じてグローバルな視点を持ち、世界の人々と対等に意見交換のできる人材を育成する。
実行サイクル	2 年サイクル（令和 6 年～令和 7 年）	2 年サイクル（令和 6 年～令和 7 年）
実施 スケジュール	国際学会への参加を奨励する。また研究成果を英語の論文としてまとめ発表する。	英語によるプレゼンテーション研修を実施する。国際協力センターの留学プログラムの周知と短期留学を奨励する。これに加えて、海外でのインターンシッププログラムの企画を検討する。
目標達成を測定する指標	国際学会への参加回数、国際学術雑誌への論文掲載数を確認する。	英語によるプレゼンテーション研修については発表会を行い成果について評価する。留学プログラムおよびインターンシップの参加状況を確認する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学科所属の研究室が国内外の研究コミュニティで研究発表に努めた。研究成果は、論文として国際科学雑誌へ 29 報掲載された。また、国際学会において 9 件の学会発表を行った。	外国人非常勤講師 Siddique Shahid 博士（UC. Davis）および渥美正太博士（UC. Davis）を招聘し、大学院の授業ならびに大学院生・教員を対象としたセミナーの開催を計画・実施した。授業では英語でのプレゼンテーション法についても修学した。また、UC. Davis と本学生命科学研究科の協定により、専攻の国際化推進の一環として教員 1 名の留学と 1 名の短期派遣が実施された。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・各研究室から国際科学雑誌に研究成果が報告され、それぞれ切磋琢磨している。	【長所】 ・UC. Davis の教員を非常勤講師として招聘し、生命科学分野のトピックスを英語で聴講したり、学生自身が英語でプレゼンテーションや質疑応答する機会を得ることができる。
	【特色】 ・植物、動物、細胞分子機能分野のいずれの分野からも研究成果を海外に発信している。	【特色】 ・英語で聴講する生命科学分野のトピックスが最先端である。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし
根拠資料名	PubMed、自己点検システム	大学院授業実施記録、生命科学部国際化に関する活動報告

学部・研究科名生命科学研究科

学部長・研究科委員長名坂田 洋一

学科名・専攻名分子生命化学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	建学の精神と専攻設置の趣旨を涵養する	最先端の知識、技術を、広汎・総合的に獲得させるとともに、自らの情報を収集し問題を解決する能力を養わせる。	全教員が協力して大学院生の教育と研究を推進させる
実行サイクル	__ 1 __ 年サイクル（令和6年）	__ 2 __ 年サイクル（令和6年～令和7年）	__ 1 __ 年サイクル（令和6年）
実施 スケジュール	新入生に建学の精神と専攻設置の趣旨について理解する機会を提供する	分野ごとの特論（一）、（二）において基礎的な知識や最新の研究の動向を理解し、自らの研究成果を報告、議論する。	特論講義、特別実験、特別演習などを通じて、全ての教員が大学院生の指導に寄与し、専攻全体で中間発表や最終発表会を実施する。
目標達成を測定する指標	報告書や議論を通じて学科教員が評価する	特別演習などで報告や議論、中間発表会、学位論文発表会で判断する。	全教員の教育と研究への寄与で評価する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	各研究室でのセミナーや勉強会を通じて、農大で化学研究を行う歴史的背景や意義を教授した。また課題、中間報告会や中間報告書、それらを介した教員や同級生との議論により、個々の大学院生の理解度を判断した。	座学、研究活動、議論を通じて、学部で獲得した知識や経験を向上させ、多岐にわたる知識を連携させる教育を実施した。研究報研究活動を通じた経験と知識の獲得を含め、複数の教員との議論を通じて総合的な能力を評価し、習熟度レベルに合わせた教育と研究を行った。専攻中間発表会や最終発表会を通じた研究室外教員との議論も有意義であった。	全ての教員が座学、研究を通じて大学院生の指導に関わった。研究室所属教員が連携して、大学院生を指導する体制作りに注力しつつ、専攻中間発表会や最終発表会を通じて、他研究室の大学院生への教育体制も構築した。大学院生による研究成果も順調にあがっている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	研究報告資料	講義要項、研究報告資料	講義要項

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	先進的な研究持続のために、外部資金の獲得に努める	大学院生が関わる研究活動の活性化と研究成果の発表を積極的に行う	適切な人事運営と充実した研究環境の整備に努める
実行サイクル	____1____年サイクル（令和6年）	____1____年サイクル（令和6年）	____1____年サイクル（令和6年）
実施 スケジュール	科研費を始めとする競争的外部資金や学内の研究プロジェクトに積極的に応募する。	大学院生が、学部生や教員がともに研究を行い、学会発表や論文の投稿などを目指す。	教員欠員枠に対する後任人事を早急に進めるとともに、研究室内の教員が協力して、各研究室の研究環境を整える。
目標達成を測定する指標	各教員が外部資金の公募に応募したかを評価する	各教員が研究成果を発表したかを評価する	機器や備品の管理や、研究環境の維持が適切に行われたか評価する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	ほぼ全ての教員が科研費へ応募しており、研究責任者もしくは研究分担者などとして研究費を獲得している教員も多い。	学科全体的に活発な研究活動が推進された。研究の性質上4年生の対外的な発表は少ないものの、主に大学院生の研究成果を論文投稿や学会発表として数多く発表出来た。他グループとの共同研究も順調に進んでいる。優秀発表賞などの受賞学生も複数見られた。	各研究室の研究設備や共通機器である核磁気共鳴装置などの維持・管理は適切に行われるとともに、実験設備の専攻内での共同利用なども円滑に行えた。設備、機器の管理においては全教員が分担し、積極的に維持・管理に参画している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・大型の外部資金獲得にも努める	【課題】 ・質の高い論文数の増加、学会発表。学生の研究意識を高めること	【課題】 ・研究活動をより活発化する様な研究室の雰囲気作りに努める
根拠資料名	科学研究費助成事業データベース、農生命科学研究所ホームページ	農大ホームページ、自己点検システム	なし

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	教育の質保障に取り組む	専攻の宣伝活動を積極的に行う	博士後期課程の適切な運営と進学者の確保
実行サイクル	____ 1 ____ 年サイクル（令和6年）	____ 1 ____ 年サイクル（令和6年）	____ 3 ____ 年サイクル（令和5年～7年）
実施 スケジュール	各教員が担当科目の内容について良い点・改善すべき点を整理し、 初年度の教育内容について検証する。	学内外で専攻の魅力について紹介するとともに、HPなどで情報発信する。	博士後期課程に進学する大学院生を獲得する。各研究室での研究活動を通じて、大学院生との議論や意思疎通を積極的に行い、専攻の趣旨や研究意義などを伝える。博士後期課程での研究レベルを維持向上させる。
目標達成を測定する指標	次年度へ向けて教育内容を見直す機会を設定する。	情報発信を行ったイベント、媒体について評価する。	博士後期課程での研究推進、進学者数など
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	各教員や各研究室内での教育活動は順調に進んでおり、修士論文発表会等を通じて、研究室を跨いだ教員間での相互確認も進んでいる。専攻全体での個々の大学院生の熟達度を適切に評価するとともに、各教員の教育と研究指導の方向性の相互確認を継続的に行う予定である。	主に学科、研究室のホームページ、教員・研究情報を通じて発信するとともに、学会活動や研究活動を通じた専攻の情報発信に努めた。専攻(学科)のホームページに関しては、本年度は学科・専攻内での情報を随時更新し、一定の効果は得られた。結果として博士前期課程は定員を大きく超える志願者が集まった。	次年度の博士後期課程進学内定者は1名を確保した。進学者の化学への興味と研究意欲を維持向上させ、活発な研究活動を推進すること、継続的な志願者の獲得が、今後の課題となる。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・特になし	【長所】 ・特になし	【長所】 ・特になし
	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・発表会などを通じて、継続的に専攻内全体の教育効果を確認する	【課題】 ・全ての研究室・教員でホームページなどを通じた情報発信に努める	【課題】 ・進学者による活発な研究活動を推進と、継続的な志願者の獲得
根拠資料名	なし	研究室ホームページ、教員・研究情報	なし

学部・研究科名生命科学研究科

学部長・研究科委員長名坂田 洋一

学科名・専攻名分子微生物学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	文献調査や学会参加による情報収集から研究の発展につなげる能力を養う。	最先端の実験技術を学ぶと共に研究のための的確な実験技術の選択と習得により研究を推進させる。	研究成果の発信と討論ができる能力を養う。
実行サイクル	__ 2 __ 年サイクル（令和5年～令和6年）	__ 2 __ 年サイクル（令和5年～令和6年）	__ 2 __ 年サイクル（令和5年～令和6年）
実施スケジュール	論文英語科目や学会参加のレポート提出等によって教員とディスカッションする。	特論科目、特別演習科目や学会の参加において最先端技術の知識を得ると共に、技術の活用について教育指導する。	研究成果の学会発表や論文発表について教育指導する。
目標達成を測定する指標	レポートの内容とディスカッションを基に教員が評価する。	専攻での発表会により教員が評価する。	専攻での発表会と学会発表の質疑応答および論文発表等を指標に教員が評価する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	論文調査の報告会や聴講した講演についてのディスカッションを実施している。	進捗報告会を頻繁に実施し、実験手法の選択の適格性や該当分野の新たな実験技術について指導している。	進捗報告会や学会発表の質疑応答について、改善すべき点等を指導している。学部2年生への中間発表会の公開と質疑応答機会の導入。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・入手した情報を精査し研究に活用できている。	【長所】 ・特になし	【長所】 ・特になし
	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし
根拠資料名	学会発表要旨。受理論文。	報告会要旨集	報告会要旨集

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	研究を推進するための最先端技術について国内外から情報収集する。	費用が掛かる最先端技術の実験が実施できる環境を構築する。	研究成果を学会発表や論文の投稿、インターネットを通じて発信する。
実行サイクル	____ 2 ____ 年サイクル（令和5年～令和6年）	____ 2 ____ 年サイクル（令和5年～令和6年）	____ 1 ____ 年サイクル（令和6年）
実施 スケジュール	論文調査および学会参加の報告レポート内容について指導する。	教員が各種外部資金を得るために必要なことを実施する。	学会への参加、論文の投稿、インターネットコンテンツの更新を行う。
目標達成を測定する指標	レポートの内容を基に教員が評価する。	外部資金申請や獲得状況を確認する。	学会発表、論文の数を確認する。コンテンツの更新を確認する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	論文調査や学会聴講の内容についてディスカッションし、実験技術情報の収集について指導している。	公的資金や企業との共同研究による研究費を獲得している。	修了までには必ず学会発表をすることとしている。また、論文発表を実施している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・特になし	【長所】 ・特になし	【長所】 ・特になし
	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし
根拠資料名	各研究室ごとに開催している研究室ゼミ資料（研究室保管）	科研費、財団助成金、共同研究経費、受託研究、寄付など。	業績（学務課）。HPの更新。

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	博士前期課程修了後の進路目標を早期に設定するため、各学生の進学／就職活動への円滑な導入を支援する。	専攻の広報をする。	国内外の学外研究者と接する機会を設ける。
実行サイクル	__1__ 年サイクル（令和6年）	__1__ 年サイクル（令和6年）	__1__ 年サイクル（令和6年）
実施 スケジュール	博士後期課程進学希望者には学術振興特別研究員制度への応募の準備や斡旋などを行う。就職活動希望者には、インターンシップ等を通じた企業活動への参加や卒業生の招致による就職支援会等を実施する。	学内外に対して専攻について紙媒体やインターネット等を通じて情報発信する。	教員を通じて国内外の学外研究者と対面やオンラインで話ができる機会を設ける。
目標達成を測定する指標	大学院説明会や就職支援懇談会実施後にアンケートやレポート等を実施し、各学生の進路調査を実施すると共に、研究室ごとに各学生の調書を作成し、適切な進路指導を行う。	情報発信した資料を評価する。	実施報告で評価する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	就職希望者に対して情報提供や支援を実施している。博士後期課程進学希望者に対し説明会を開催している。	SNS を通じて研究内容や学会活動について発信している。学科 HP を通じて発表論文や学会賞受賞者などを公開した。	学外の研究者による特別講義を実施、国内外の研究者と研究を行う機会を設けている。国際学会への参加も積極的に実施している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・特になし	【長所】 ・特になし	【長所】 ・特になし
	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし
根拠資料名	DC1,DC2 公募説明会参加出席表など	Instagram、Twitter、学科 HP など	海外留学生の積極的な受け入れ。国際学会への参加など